

26 葵祭

あおいまつり

知る

どんな祭？

葵祭は、賀茂神社の祭で、祇園祭・時代祭と並ぶ京都三大祭の一つです。その呼び名は、祭に葵(フタバアオイ)を多く用いたことに由来し、元禄年間(一六八八～一七〇四)の再興以後呼び始められました。正式には賀茂祭といわれ、上賀茂神社(上社)と下鴨神社(下社)で五月一カ月間に行われる祭礼の一口を指しています。



平安時代の葵祭(賀茂祭)の様子。右上には行列を見物するための「棧敷」が見えます。「年中行事絵巻」

『山城国風土記』によると、六世紀中葉の欽明天皇の時代に鴨の神の崇りで飢餓疫病が蔓延したため、賀茂(あかたぬし)一族を中心に、氏の内々の祭を行つたのが起源だと伝えられています。

七世紀後半には現在地に社殿が造営され、周辺地域からも祭に参加するようになり、国司が監督を行う公的な祭へと移行しました。

更に、長岡京・平安京遷都に伴って、朝廷から皇城鎮護の神と崇敬され、弘仁年間(八

一〇～八二四)には齋院の設置や、祭礼の勅祭化が行われました。以降、『源氏物語』葵巻に見物の場所をめぐって牛車(ぎうしゃ)が争う様子が描かれるなど、その有様は、物語や貴族の日記に詳述されるようになりました。

しかし、さまざまな理由で祭祀の経費が増大したために、文亀二(一五〇二)年以降約二百年もの間、勅使の派遣が中絶し、実質的に祭礼は断絶しました。

再興後の葵祭



江戸時代の葵祭(賀茂祭)の様子。『都名所図会』巻六

その後、祭礼は、元禄七(一六九四)年に、江戸幕府の後援や霊元上皇などの努力で復興されました。また、祭で用いられる葵が徳川将軍家の家紋であり、将軍家も祭を重視したため、祭の前に葵(あおい)を将軍に献上することもありました。そして、この頃より、葵祭と呼ばれ始めたのです。

明治時代に入ると、東遷都や神祇制度の改変などで祭は縮小されましたが、明治十七(一八八四)年に下社の神官などの尽力で、勅使行列が復

活し、祭日も太陽暦の五月十五日と定められました。

第二次世界大戦中の昭和十八（一九四三）年以降、行列は再度中止されましたが、同二十八年に葵祭行列協賛会などの努力で復興、同三十一年には斎王代以下女人列が加えられ、今日私達が目にする葵祭の行列となったのです。

このように、葵祭の勅使派遣や行列の実施は、長い歴史の中で紆余曲折がありました。社家の人々は、その間も、社頭の儀などの神社内の祭を変わることなく大切に脈々と守り続けていたのです。

賀茂神社とは

賀茂神社は、賀茂別雷神社（上賀茂神社）と賀茂御祖神社（下鴨神社）の二社からなり、上社には雷神の賀茂別雷神を、下社には雷神の祖父賀茂建角身命と母玉依姫命の農耕神二柱を祀っています。

両社は元々、京都盆地北部の豪族、賀茂県主一族の氏神で、奈良時代中頃までは一つだったのが、そこから下鴨神社が分立したと考えられています。

更に、両社はともに広大な森に包まれており、祭ごとに神山から祭神を迎える神迎えが行われるなど、社殿出現以前の古代信仰・自然信仰が現在まで色濃く残っています。

斎王

斎王は上・下両社に奉仕した王家の未婚女性のこと。在任中は賀茂（紫野）斎院（上京区上御霊前通大宮西入、櫛谷七野神社周辺）で生活を行い、日常的に忌詞などを用いて不浄や仏事を避け、祭事に従事していました。

弘仁元（八一〇）年の薬子の变の際、嵯峨天皇が賀茂神に戦



賀茂（紫野）斎院跡（櫛谷七野神社内）

歩く／見る

葵祭を中心とした現在の賀茂祭の行事とは、どのようなものなのでしょうか。

五月一日

上社（上賀茂神社）の競馬足汰式（馬場殿の前）五日の競馬会に出走する馬二十頭を集め、馬の歯・毛色から馬齢や健康状態を確認し、次いで、一頭ずつ走らせて、馬上の姿勢、鞭の指し方、走る速さなどから当日の番立（出走の組合せ順序）を決定します。最後に、番立順に二頭ずつ走らせて馬や乗尻（騎手）の様子を見る予行演習的な行事です。

五月三日 下社（下鴨神社）の流鏝馬神事（糺の森馬場）公家装束の射手が馬を疾走させ、馬場（約五百メートル）に

勝祈願したことから設置され、初代有智子内親王（嵯峨天皇皇女）から十三世紀初頭の礼子内親王（後鳥羽天皇皇女）までの三十五名、約四百年もの間続き、その後廃絶しました。そして、昭和三十一年になつて、祭の「路頭の儀」に斎王代・女人列が加えられ、京都に住の未婚女性から斎王代が選ばれるようになり現在に至っています。

ある三カ所の的に、「インヨー（陰陽）」と声をかけ矢を放ちます。

祭の無事を祈り下社の境内を被い清め、矢が的に当たれば豊作・諸願成就といわれています。上社の競馬会に准じた行事です。

五月五日 上社の競馬会神事（参道脇の馬場）

菖蒲の根の大小を競う根合わせ神事や乗尻などによる被奉幣・祝詞の奏上といった競馬会の無事終了を祈願する神事が行われた後、五番の競馬が行われます。終了後、勝者が勝の報告をし、次いで、参加者が宴会を行って神事は終了します。

本来この神事は、本祭とは全く別の祭でしたが、現在は前儀と位置づけられています。

五月五日 下社の歩射神事（舞殿の前）

祭の沿道の邪気を被うための弓神事で、直垂姿の数名の射手が楼門内の祭庭で大的に向かって次々と矢を放つ大的式と、一人の者が楼門の上に向けて高々と鏑矢を放つ屋越の神事の二部からなっています。

五月上旬吉日 齋王代御禊（上社・下社の御手洗川）

齋王代と女人列五十余名の穢を被う神事です。神官が中臣被を読みあげた後、齋王代が御手洗川に手をひたして御禊を行い、次いで、上社では人形で胸を三度まで、下社では齋串を振り、最後に各々息を吹きかけて川へ流し再度穢を被います。同様に女人列の人々も被を行います。

現在は、上社の櫛の小川と下社の瀬見の小川で一年交替で

行われています。

五月十二日昼 下社の御蔭祭（御蔭神社から下社）

下鴨神社の神霊迎えの重要神事です。

神職や旧下社領五カ郷の氏人など約百名が御蔭神社（左京区上高野東山）に向かい、そこで神職が神霊の宿った神木を櫃に納めます。途中、賀茂波爾神社（左京区高野上竹屋町、通称「赤の宮」）で路次祭を行い、氏子地内を巡った後、糺の森に入り、表参道の切芝（祭祀場）で東游の舞を行い、本殿に神霊を祀ります。

五月十二日夜 上社の御阿礼神事（御阿礼野から上社）

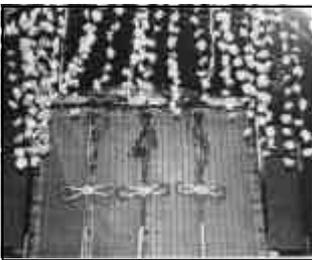
上賀茂神社の神霊迎えの神事で、上賀茂神社の祭祀の中でも最も古く荘厳な神事といわれ、奉仕する神職以外は見るこ

とができません。神体山である神山と本殿との間にある丸山の一角に仮の祠（御阿礼所）を作り、ここで新しい神霊を榊に移した後、本殿に神霊を祀ります。

五月十五日 葵祭 路頭の儀（京都御所 下社 上社）

五つのグループから構成された総勢五百十二名（馬三十六頭、牛四頭、牛車二台、腰輿一基）、約一キロメートルの行列です。

それぞれに平安時代の装束に身をかため勅使・齋王代を警固しながら、午前十時半に京都御所建礼門前を出発し、下・上両社（各社到着後、社頭の儀が行われる）に向か



齋王代の乗る牛車。御簾に葵がかけられている。

う約八キロメートルの行程です。これが、一般に葵祭と呼ばれている行事です。

- 第一列 警護列(檢非違使・山城使)
 - 第二列 幣物列(御幣櫃・内蔵寮史生)
 - 第三列 走馬列(走馬 御馬・馬寮使)
 - 第四列 勅使列(牛車 御所車・舞楽人・勅使 近衛使)
 - 第五列 斎王列(斎王代・女人・牛車 女房車)
- 現在では斎王列に注目が集まりがちですが、本来は天皇から賀茂神に幣物と祭文(宣命)とを奉る勅使列(第四列)を中心とした行列です。これは、一般の祭礼の御神体が渡御する神幸行列とは異なる行列です。

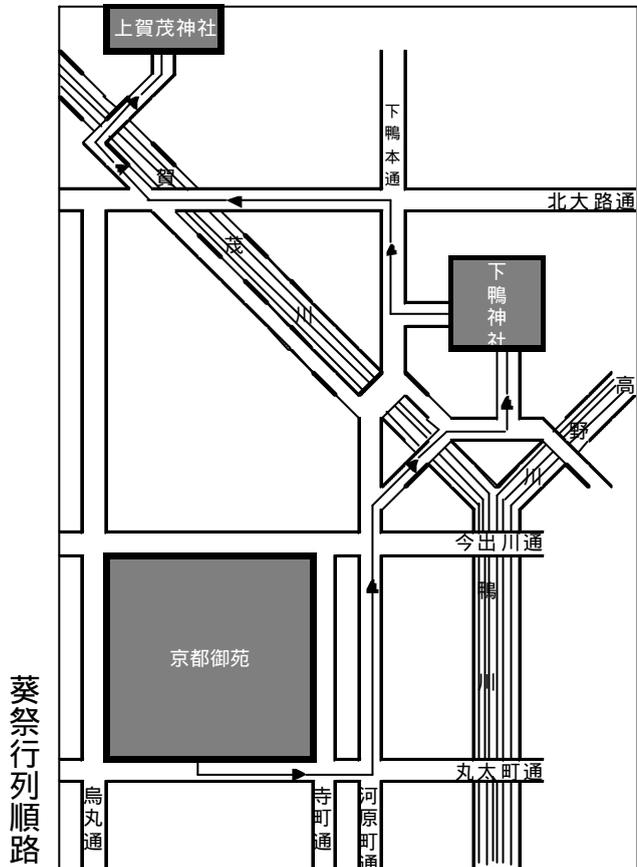
五月十五日 葵祭 社頭の儀(下社・上社の社頭)
 賀茂神に対する祭文(宣命)・幣物の奉納儀と饗宴儀とからなっており、本来、これらが祭の中心でした。

まず勅使が内蔵使より祭文を受け取り、奏上します。次いで宮司が祭文・幣物を神前に奉納し、神からの神宣・返祝詞を申し、勅使は葵桂を授かり退出します。その後、饗宴儀に移ります。まず二頭の神馬が舞殿を三周廻り、次いで東游の舞を奉納します。更に上社では、走馬の儀や御阿礼所で祝詞を奏上する山駈け神事が行われ一日の神事が終了します。

なお、賀茂社の祭文は古来より紅紙に書かれ、両社合わせて一通なので、下社での社頭の儀の後、上社に納められます。

この他、戦後、加えられた協賛事業として、五月四日の献香祭・奉納古武道(下社舞殿)、五月六日の献花祭(下社)、五月十七日の献茶祭(上・下社)・煎茶献茶祭(下社)などがあり

ます。



葵祭行列順路